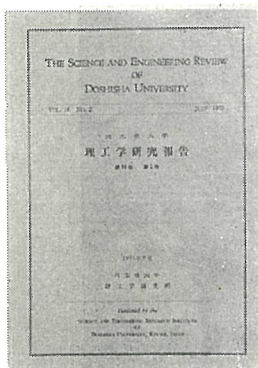


『理工学研究報告』



「理工学研究報告」は大学工学部に属する専任教員の研究発表機関誌であつて、年四回刊行されている。工学部は電気、機械、化学の三系列からなっているから、論文もこれら三分野に属するものであるが、時には一般教育自然系列に属する教員が各自の専門分野で

の研究を発表することもある。なお、投稿者は教員との共同研究者として実習助手、大学院学生、学部学生、あるいは学外研究機関の研究者も名を連ねることもある。

さて、従来から各大学、研究所は大抵各自の研究成果を発表するため、刊行物を持っているのであるが、一体、大学における紀要とは如何なる存在理由があるのであろうか。これは、実は古くして新しい問いなのである。ことに経済面と人員との限られた私学にあつては、教員はただでさえ雑用に追われている中で、紀要担当員（工学部では毎年三名の教員が選出される）は、多くの時間と努力とを掛けて校正事務を行い、多額の出版費と専任事務員を置いてまでして紀要を刊行する必要

があるのだろうか。このような問いがかなり前から提起されてきたのである。ことに近頃では学問が細分化し、大抵の研究者は、二つないし三つの学会に連なっており、各学会はそれぞれの学会誌を刊行しているから、大げさに言えば、現代は正に研究情報の洪水時代ということができよう。正直言つて毎月手元に送られてくる学会誌でも、もし丹念に精読すれば、それだけで時間を取られて、他のことは何もできないであらう。正に亡羊の嘆である。このような状況下に、無理してまで紀要を出す必要があるだろうか、との意見も当然あるわけである。さらに私は、以前から本誌の存在に対して、かなり批判的な意見を聞いている。曰く、「本誌は学会誌と違ってレフェリーの審査なしに論文を発表できるから、昇進のための論文かせぎの具となる」。或いは「大した論文でない、いわゆる捨て論文の受理機関である」等々かなり手厳しい。確かに紀要はこれらの皮肉つた批判に該当する恐れを充分持っていることも否定できないと思う。しかし、だからといって、紀要そのものの存在を否定するのも、いささかの早計といふものであらう。昔からよく言われている

ように、利点と欠点とは互いに背中合わせのものである。私は、大学・研究所の紀要は多くの問題点を持ちながらも、なおかつ存在の意味があると思う。以下にその利点と思われるところを二、三挙げてみよう。

最近どの学会も投稿論文が激増したため、頭を痛めている。そのため、学会では投稿者にできるだけ短い論文を要求し、図表や数式などでもできるだけ簡略化するように求めている。それでも投稿論文が多いために、論文が受理されても印刷物になるまで早くて半年、遅い場合は一年以上待たされるのが普通である。投稿者にしてみれば、これだけは是非掲載して欲しいと思う事項も、論文審査の段階で容赦なく切り捨てられたり、ケチを付けられたりして、がっかりすることもしばしばである。ところが紀要の場合は紙数も充分に与えられているから、納得のいくまでかなり贅沢に図表や数式を用いることもできる。さらに、投稿してから印刷される期間も学会誌のそれと較べてかなり早いから、人に先駆けて発表したい場合など誠に好都合である。しかも本誌の場合、化学の系列で言えば Chemical Abstract のような世界的規模の論文要約

誌に掲載してくれるから、世界中の研究者の目に留まることにもなる。事実、国の内外から別刷を請求してくる場合も多い。また学会によっては、非常に厳選主義を守って、誰からも立派な論文と評価されるもの以外は掲載しない方針のところもある。正直言って研究者としては一流の論文とはいかないにしても、やはり活字にして残しておきたい研究もあるわけで、このような場合、紀要は誠に好都合である。また発表の当時には、あまり大した評価をされないものでも、後になつてその価値を認められる場合も過去に幾度かあったことを記憶すべきであろう。また本誌と交換に、国内（三四一部）・国外（一三五部）の大学・研究所の刊行物が本学理工学研究所に寄贈されていて、研究者に多くの便益を供しているのも、本誌の利点と言ふべきであろう。前述のように、本誌は、大学院や学部、学生も、教員と共著の形で名を連ねることができ、から、学生が精魂込めて行った研究の成果を印刷物として残し、学会に何らかの貢献をすることができ、このことは学生にとっても非常な励みにもなる。卒業後はアカデミックスな仕事に無関係となる人が多いだけに、学

生時代のよい記念碑ともなるのである。

「理工学研究報告」は、昭和三十四年、同志社理工学研究所が設立されたこともあって、翌三十五年に本誌の前身である「同志社工学会報」を引き継いで創刊された。大学工学部が設置されたのは昭和二十四年であるが、翌二十五年に「同志社工学会報」創刊第一号が出ているのである。当時の社会事情を回想してみると、中年以上の人はよく記憶しておられるように、戦後の数年は誠にひどい時代であつた。電気はしばしば停電、ガスは時間供給、研究設備や条件はお話にならない程お粗末なものであつた。さらに食糧事情は最悪の中で、研究者はカチカチのコッペパンをかじり、学校の食堂に行列して、天井が写るようなシャブシャブの雑炊に飢えをしのぎながら、研究に取り組んだものであつた。このような悪条件を克服して研究成果をあげ「同志社工学会報」を刊行された当時の人々に改めて敬意を表したいと思う。いま創刊号を手してみると、当時の社会状況を反映して紙質も悪く、装丁も誠に粗末なものであるが、堀場工学部長の発刊の辞や、当時の新進気鋭の研